

常陸国における太閤検地の実態

山 田 哲 好

はじめに

太閤検地についての研究は、一九五三～四年にかけて、いわゆる「太閤検地論争」が展開され、その後も、近世村落成立過程の問題と関連して、諸先学より様々な見解が出されてきた。しかしながら現時点での研究の成果を整理し、まとめることは決して容易なことではなく、いまだ解決されなければならない多くの問題が残されている。⁽¹⁾

とりわけ、常陸国における太閤検地、及び近世村落の成立過程に関する論考は少なく、太閤検地に関しては、水戸を中心とした茨城・那珂・久慈の諸郡（『佐竹領』）を対象にしたものであった。そこで小稿では常陸国一国全般にわたる太閤検地の施行過程とその実態を検地帳の分析を中心に紹介しようとするものである。

(一) 常陸国における太閤検地の施行過程⁽³⁾

表1の年表は、常陸国において太閤検地施行年間（天正一〇年～慶長三年）に実施されたと考えられる村を文献、及び史料に基き作成し、出典と検地帳の場合は残存状況を示したものである。これにより、検地施行年代は、文禄三

検 地 年 表

残 存 状 況	出 典
全 8 冊・写	浜田孝久家文書
全 4 冊の内 2 冊	「土浦市史編集資料」(第 8 編)
全 1 冊・写	(同 上)
	「土浦新領引渡帳」△ (平沢村 結束庄左衛門家文書)
全 13 冊の内 6 冊	栗原義郎家文書
	「沢辺村長百姓七人統之覚」△ (御田寺義憲家文書)
全 3 冊	鈴木政之助家文書
全 4 冊の内 左記日付 の屋敷帳の表紙が付け られた 1 冊があるが内 容は田畑水帳	藤沢勘兵衛家文書
全 2 冊カ、現存する検 地帳(1 冊)は、元禄 11 年土浦領分となった 際に、久松家一族分を 改めたもので左記兩日 の改め日付がある	久松恵治家文書
	元禄 4 年「明細帳」△(藤沢光家文書)
	「県方集覧」△(上境村酒井泉家文書)
全 6 冊	沼 尻 隆 家 文 書
4 冊	小神野藤右衛門家文書
	「田制考証」(「近世地方経済史料」第 8 卷所収)
4 冊	酒井治部家文書
全 6 冊の内 1 冊	本橋こと家文書

表 1 常 陸 国 太 閤

郡名	村 名	年 代	検 地 奉 行
新治	沖 宿	文禄 4. 3. 9~14	田辺十郎右衛門 飯 室 庄 助 風祭太郎右衛門 山 浦 五郎七
	神 立	文禄 4. 2. 29~30	(破損の為不明)
	小山崎	文禄 3. 11. 28	田 辺 十右衛門 高 野 善 拾 山 浦 弥 蔵 鳥 居 加左衛門
	広 岡	(文禄年間)	
	坂 田	文禄 4. 2. 8~18	田 辺 十右衛門 高 野 善 拾
	沢 辺	文禄 2 (3の誤カ)	
	田土部	文禄 3. 11. 2~4	山 浦 弥 蔵 鳥 居 加左衛門 田辺十郎右衛門 高 野 善 次
	古 来	文禄 3. 11. 晦	青 木 勘左衛門 玉 勢 茂右衛門 加 藤 彦右衛門 堀 田 長 六
	島古来	文禄 3. 11. 28~晦	(同 上)
		文禄 3	(同 上)
		(同 上)	(結城様御代検地)
	金 田	文禄 3. 11. 22~27	青木勘右衛門尉 堀 田 長 六 玉勢代右衛門尉 加藤彦右衛門尉
	花 室	文禄 3. 12. 2	
	上 室	文禄 3. 12. 3~7	青木勘右衛門尉 堀 田 長 六 玉 勢 義右衛門 加藤彦右衛門
	大	文禄 3. 11. 20	(同 上)
	中 根	文禄 3. 11. 16	(不 明)

残 存 状 況	典 出
全7冊 破損大	佐 藤 茂家文書
全9冊の内 6冊 破損大	大 里 正 夫家文書
	「県方集覧」△
2冊・写	田 上 伝左衛門家文書
	「県方集覧」△
	(同 上)
	(同 上)
全1冊	清 水 昭 家文書
	「田制考証」
	「水戸市史」(上巻) 「安得虎子」(東大史料編纂所)
全1冊 文政6写	酒井林七家文書
全1冊・写	福 田 嘉 雄家文書
1 冊・写	「土浦市史編集資料」(第8編)
全5冊	広 瀬 正 雄家文書
全6冊の内 2冊	長 南 俊 夫家文書
全6冊 一部破損	酒 井 和 男家文書
全9冊の内1冊の一部	「土浦市史編集資料」(第8編)
全5冊	雨 貝 十 郎家文書
全1冊	「土浦市史編集資料」(第24編)
全1冊	荒 井 ふ く家文書
	「水戸市史」(上巻) 「安得虎子」

郡名	村 名	年 代	検 地 奉 行
	玉 取	文禄 3.11. 2~6	青木勘右衛門尉 堀 田 長 六 玉勢代右衛門尉 加藤彦右衛門尉
	田 中	文禄 3.10.23	(同 上)
	手 野	文禄 4	(結城様御代御検地)
	大 畑	文禄 3.12	
		文禄 3	(結城様御代御検地)
	田 宮	(同 上)	(同 上)
	吉 瀬	文禄 4	(大久保十兵衛様御検地)
筑波	山 口	文禄 3.12	佐 竹 義 宣 立又左衛門打口
	上 境	文禄 3.11.19	青 木 勘右衛門 堀 田 長 六 玉 勢 茂右衛門
	作 谷	慶長3以前 文禄年 門力)	(佐竹奉行力)
	小 高	文禄 3.12.14	佐 竹 義 宣
	永 井	文禄 3.12.13	(同 上)
信太	土 浦	文禄 4. 3. 9	青 木 勘右衛門 堀 田 長 六 山 内 弥 作 加 藤 彦右衛門
	小 松	文禄 4. 3. 5~7	大久保 十兵衛
	大岩田	文禄 4. 3.17~21	(同 上)
	烏 山	文禄 4. 3.23~28	(同 上)
	穴 塚	文禄 4. 2.24	(同 上)
	矢 作	文禄 4. 2. 6~10	
	永 国	文禄 3.12.14	青 木 勘右衛門 堀 田 長 六 玉 勢 儀衛門 加 藤 彦右衛門
河内	小野崎	文禄 3.10.11	宮 次兵衛
真壁	山 尾 以下8 ヶ村※	慶長 2. 4.27	大縄与一左衛門 他4名

残 存 状 況	出 典
	「水戸市史」(上巻)
	「水府志料」(「茨城県史料」近世地誌編所収)「田制考証」
	「水戸市史」(上巻)
	(同 上)
	「水府志料」
	(同 上)
	「田制考証」
	(同 上)「水府志料」
	「田制考証」
	「水戸市史」(上巻)「田制考証」
	(同 上)
全1冊	矢 野 仁太郎家文書
	「水戸市史」(上巻)

年一〇月を最初に、同四年、慶長二年、同三年の四ヶ年であることが明らかとなる。そこで検地奉行を検討してみると、大きく五つのグループに別けられる。それは、(1)石田三成、(2)佐竹義宣、(3)大久保十兵衛(長安)、(4)田辺十右衛門等他六名、(5)青木勘右衛門尉等他三名である。ここで、論を進めるにあたり、小稿における太閤検地の分析視角について一言しておきたい。太閤検地を、

(A) 豊臣直臣団による検地

(B) 豊臣直臣団が、自領内において(A)と同様な方式で実施した検地

(C) 徳川氏等の大名が、自領内で全く独自の方法で実施した検地

以上の三つに分類した。(3)のうち、(A)は豊臣直臣団による検地であるので純粋な太閤検地であり、したがって検地奉行も

郡名	村 名	年 代	検 地 奉 行
茨城	那珂宿	文禄 3.11.24	
	木葉下	慶長 3	牛丸兵左衛門
	又 熊	慶長 3	(同 上)
那珂	上河内	文禄 3.11.20	石 田 治部少輔
	石 神	文禄 3.11.19	(同 上)
	桧 沢	文禄 3.10.23	牛 丸 兵左衛門
		慶長 3	(同 上)
久慈	下小瀬	文禄 3.10.29	石 田 治部少輔
	松 平	文禄 3.10. 6	村 井 勝左衛門 菅 沼 彦左衛門 (藤林三右衛門配下カ)
	久 米	文禄 3.10. 7	石 田 治部少輔
	和田安	文禄 3.10. 9	
下野国	小 深	文禄 3.10.29	牛 丸 兵左衛門
茂木内	飯 野	文禄 3.11. 1	

※ 山尾の他 田，茂田，大関，出，飯田，大曾根，長岡，塙瀬の8ヶ村

秀吉のもとで派遣されたものである。(C)の場合、秀吉から直接の命を受けたものではなく、各々の大名が自領内で実施した検地であるので純粋な太閤検地とは言いがたい。従来のように、単に太閤検地施行年代に実施された検地ということだけで、太閤検地一般の政策基調論に解消させてはならないであろう。この分析視角によって、検地奉行(1)～(5)のグループを検討してみよう。

(1)の石田三成は、言うまでもなく秀吉の直臣であり、したがって彼の施行した検地は純粋な太閤検地であって分類では(A)となる。その地域は、佐竹氏の本領であるところの久慈・那珂両郡で、この検地出目に基き、翌文禄四年六月、秀吉からの朱印状により、豊臣氏の蔵入地が設定された地域でもある。

(2)の佐竹義宣の場合を検討してみると、筑波郡山口村、同郡小高村の検地帳の記載形式は、(A)石田三成による検地帳と同じで、石盛も一致する(山口村の検地帳だけに分付記載がある)。さらに、屋敷地にも等級がつけられていることも一致する。当時の佐竹氏は、豊臣政権と密接な関係を保っていたことから、秀吉の命を受けて、佐竹氏が独自に実施した検地ではなく、したがって分類では(B)となり純粋な太閤検地と言えよう。その地域は、本領より遠方の筑波郡や下野国であり、石田三成が実施した地域とは対照的である。文禄三年の佐竹領の検地は翌年六月の知行割の朱印状の前提となるもので、この朱印状により、佐竹氏の領国統一が完成されるのである。朱印状で特に注目されることは、義宣の蔵入地は以前の凡そ一〇倍の一〇万石に増加したこと、これと引替に新たに豊臣氏の蔵入地が設定されたことである。その地域は、前述したように佐竹氏の本領内である。なお、慶長二年、同三年の佐竹氏の直属家臣による検地は、麦田検地という特殊な検地であるのと、新たな知行割の必要性から佐竹氏独自に実施した検地であるので、分類では(C)に属するものである。

(3)の大久保十兵衛(長安)は、徳川氏の地方支配の上で重要な役割を果たす代官頭であり、したがって彼を奉行とする検地は徳川検地で分類では(C)に属するものである(因みに彼は前年の文禄三年には下総国で惣奉行として検地に臨んでいる⁽⁶⁾)。その地域は、信太郡が中心で佐竹氏一族の蔵入地が全く設定されていない地域である。

次に、(4)・(5)のグループは結城氏の家臣であることが史料的に判明する⁽⁷⁾。家康の天正一八年関東入封の際の知行割で、結城秀康は家康の第二子で秀吉の養子となっていたが、秀吉の命により関東の名族結城氏の跡を継いで結城に封ぜられた。さらに慶長六年に越前に転封されるまで土浦城主をも兼ねていた。したがって結城氏は徳川氏の上級家臣であるので(3)と同様徳川検地であって分類では(C)に属するものである。その地域は、土浦を中心とする桜川流域で、やはり佐竹氏一族の蔵入地が設定されていないことは注目されよう。

ところで、天正一八年、徳川氏の関東入封の際の知行割で秀吉から与えられた領国は、後北条氏の旧領土であり、常陸国では徳川領が存在しないことになるが、現実に徳川家臣団による検地が施行されていることから、土浦を中心として新治・筑波・信太の各郡に徳川領が複雑に入組んでいたと考えられ、これらの各郡が徳川氏と佐竹氏の領国の接点であったと言えよう。

以下、それぞれの分類ごとに検地帳の分析を中心として検地の実態を検討してみよう。

(二) 検地帳の分析とその検討

(1) 分類(A)Ⅱ石田三成検地

豊臣直臣団Ⅱ石田三成による純粋なる太閤検地帳は、現存するものは那珂郡上河内村一村だけである。⁽⁸⁾ 当村は水戸に近い那珂川流域の低地に位置する、田畑合わせて二〇町一反余、村高一九五石余の小村で、たびたび那珂川の氾濫の被害を受けている。まず、検地帳の表題と記載形式を示そう。

文禄三年霜月廿日

常陸国那珂郡内上河内村御検地帳

石田治部少輔奉行

藤林三右衛門

やしきのうしろ

下田 十四間廿八間 一反三畝二歩 一石一斗七升六合 介左衛門

常陸国における太閤検地の実態(山田)

同所
上田
同所
下々田

十三間卅間

一反三畝

一石六斗九升

七郎四郎

五間六間

一畝

七升

太三

表 2 検地帳分析表

郡 村 名		那珂郡上河内村			
年 代		文 禄 3 年			
総 反 別		1936 畝 09			
屋 敷		有	無	計	%
名 請 人 階 層 表	2町以上～3町未満		1	1	1.1
	1 " ～2 "	1		1	9.2
	9反" ～1 "				
	8 " ～9反"				
	7 " ～8 "		1	1	
	6 " ～7 "	1	1	2	
	5 " ～6 "		4	4	89.7
	4 " ～5 "	1	4	5	
	3 " ～4 "		5	5	
	2 " ～3 "		15(6)	15(6)	
	1 " ～2 "	1	21(8)	22(8)	
	1 反 未 満		31(1)	31(1)	
計		4	83(15)	87(15)	
屋敷地名請人 %		4.6			

＜備考＞「水戸市史」上巻より複製 入作2名は除く

※（ ）内は武士の名前を有するもの 打出高 195石004

田畑共に四等級で、小字名、堅横の間数、一筆ごとの反別、分米、名請人が記され、典型的な太閤検地帳の記載形式をとっている。又、分付記載がないのが特徴であり、検地棹は六尺三寸棹であったとされている。そこで名請人の階層表を示すと表2となり、名請人総数八七名は小村にしては非常に多いことが特徴である。この八七名の内、五反以下の零細な名請人が七八名で全体の九〇%にも及ぶが、他村にも出作地を持っていたことも考えられる。村内最高の二町一反六畝余の名請地を持つ「介左衛門」が無屋敷名請人である。

この家は後、庄屋になるいわば草分け的な農民であり、村役人として特権によって屋敷地を免除されたものである。又、名請人の名前に、弥四良・弥五良・弥八良・弥十良、二良衛門・四良衛門・五良衛門、というような同一家族と考えられるのがみられ、その中の大多数は零細農民として名請されている。さらに、寛永年中の当村の竈数は二一軒であると言われ、この検地帳に名請された者すべてが一軒前の農民として自立経営が可能であったことは考えられないし、他村からの入作者も少なくなかったとされている。しかしながら検地施行者の意図は、零細農民を一軒前の自立小農民として公認しようとする、全国的な政策基調である小農民自立政策を貫徹しようとしたものと考えられる。

(2) 分類(B)Ⅱ佐竹義宣検地

ここでとりあげるのは、筑波郡山口村で、翌文禄四年六月の知行割で佐竹義宣の蔵入地とされた地域である。まず検地帳表題と記載形式を示そう。

文禄三年拾貳月
常陸国筑波郡山口村御縄打水帳
佐竹義宣奉行立又左衛門打口

やなき町

上田 十六間

同 四十二間

式反四畝拾六歩

三石壹斗八升九合

加賀

上田

九間 四十二間

式反三畝廿四歩

壹石七斗九升四合

内膳

常陸国における太閤検地の実態(山田)

同

上田 十間
四十六間

壹反五畝拾歩

壹石九斗九升三合

源衛門まへ
新兵衛

前述の那珂郡上河内村の石田三成による検地帳の記載形式と全く同様である。山口村は田畑の割合は七対三で田勝地で、上田、上畑が全耕地の半分以上を占める生産力の高い土地柄である。石盛は上田が一三で以下等級が下がることに二つ劣り、畑方は上畑一二で、同じく二つ劣りになっている。これは那珂郡上河内村の石盛と同じである。したがって石盛は、その村々の土地柄の善悪を考慮して決められるものではなく、検地施行者によって統一された基準で行なわれたことになる。又、屋敷地は、すべて「上屋敷」と記され、屋敷地にも等級が付けられていたと考えられる。これに関連して、「水府地理温故録」によると、文禄三年の石田三成の検地についての条に、「屋敷（の石盛）は畠に準、亦上中下の別あり」、とあることによって、さらに、「田制考証」¹⁰では、那珂郡小瀬村の検地帳にも上・中の等級があるとされている。しかし、いかなる基準をもって等級を付けたかは明らかではない。以上のように、石田三成による検地基準を、記載形式、石盛、屋敷地の等級づけでそのまま踏襲したものであって、やはり佐竹氏独自の方法によるものではない。しかし、当村の検地帳には記載形式に示されているごとく、「源衛門まへ」というような肩書記載が広汎に見られるのが特徴である。この肩書記載は、「まへ」が「分」と記されている部分もあり、又、同時代の扣と考えられる同じ検地帳と本書を照合してみると、「まへ」が「分」と混合して記されているので分付関係を示すものである。このような分付記載は、石田三成による検地帳には記されていない。そこで検地帳の分析結果を示すと表3となる。名請人総数一二名の内、五反以下の零細名請人が八九名で、全体の八〇%にも及ぶ零細化が目立ち、さらに、屋敷持は一〇名で、総数の約九%で非常に少ない。三三町余、三六石余を名請している村内最高の高持である「加賀」が屋敷持ではない。恐らく特権的な農民で縄除地として免除されたものであろう。このような事例

表 3 検地帳分析表

	郡 村 名	筑 波 郡 山 口 村			
	年 代	文 禄 3 年			
筆数	全 内 屋 体 敷	791 13			
反 別	全 一 人 平 均 体 敷 最 高 反 別	3992畝25 35. 19 332. 07			
石 高	全 一 人 平 均 体 敷 最 高 持 高	414石347 3. 700 36. 054			
	屋 敷	有	無	計	%
名 請 人 階 層 表	3町以上～4町未満		(1)	(1)	1.7
	2 " ～3 "	(1)		(1)	
	1 " ～1 "	(3)	4 (3)	7 (6)	18.8
	9反" ～1 "	(1)	2 (1)	3 (2)	
	8 " ～9反"				
	7 " ～8 "		2 (1)	2 (1)	
	6 " ～7 "		(1)	(1)	
	5 " ～6 "	2	6 (4)	8 (4)	
	4 " ～5 "	(1)	7 (3)	8 (4)	79.5
	3 " ～4 "	(1)	6 (2)	7 (3)	
	2 " ～3 "	1	9 (1)	10(1)	
1 " ～2 "		30(7)	30(7)		
1 反 未 満		34(4)	34(4)		
	計	10(7)	10223	11233	
	屋敷地名請人 %	8.9			

※ () 内は武士の名前を有する者

は近村においても確認できる。⁽¹¹⁾ 屋敷持一〇名の内、武士的名前を有するものは七名で大多数に及ぶが、五反以下の零細名請人にも武士的名前を有するものがみられる。山口村の西隣に位置する北条町(中町・新町)の寛永一二年の名寄帳⁽¹²⁾によると、山口村からの入作者もみられ、寛永期以前の文禄期段階では、いまだ村切りが明確に行なわれてい

表 4 分 付 関 係 表

記 載 形 式	人 数
分付主としてのみ現われたもの	3
分付主にして主作地をもつもの	9
分付主・主作地・分付として現われたもの	5
主作地のみをもつもの	23
他人の分付にして主作地をもつもの	29
分付としてのみ現われたもの	43
計	112

いことを考えると、北条町のみならず出作者入作者も存在したと考えられる。又、名請人には苗字を肩書された者も数名存在する。彼らは、元和期以降からの記述がある過去帳にも現われない者であることから、下級給人で半農半士的な者が名請されたものと考えられる。

さて、山口村の検地帳は前述したごとく、広汎な分付記載が特徴である。総筆数七九一筆の内、四五〇筆にも及ぶ。この分付記載を検地帳上での記載形式にしたがって分類すると表4となる。これにより、分付として現われたものは七七名で全体の六八・八%を占めるが、この内、「分付主・主作地・分付として現われたもの」、及び、「他人の分付で主作地をもつもの」は純粋な分付農民ではなく、純粋な分付農民は四三名で、全体の三八・四%を占める。この四三名の者がいかなる階層の者であるか検討するために作成したのが表5である。これにより、村内第六位の「外記」を筆頭に、村内第一〇位の「拾衛門」、第一位の「勘解由」、この三名の他、四〇名のすべてが五反以下の零細農民によって占められ、わずか一筆しか名請されていない者が一九名にも及ぶ。したがって彼らの大多数は零細農民であり、階層表に示されたごとく、約八〇%にも及ぶ。

さらに彼らの分付主、とりわけ上位三名の分付主の内訳を示すと表6となる。村内最高の高持である「加賀」は、自己名請地をはるかに上回る四町五反五畝余、三八石余を二一名の分付農民の分付主となっている。これらの分付関係表より明らかなことは、分付主——分付百姓の關係は、ある特定の分付主から分付

表 5 被 分 付 者 内 訳 表

村内 順位	被分付者名	分付 主数	反 別	石 高	筆数	村内 順位	被分付者名	分付 主数	反 別	石 高	筆数
6	外 拾 記	5	146畝03	14石947	41	72	孫 七 順	1	11畝14	1石492	1
10	拾 門 由	5	97.05	9.092	27	76	久 郎 順	3	10.22	1.165	4
18	勘 解 斗	1	56.29	5.918	15	80	八 郎 四 郎	1	9.14	1.124	2
26	主 五 郎 門	4	44.28	4.025	11	91	源 二 郎	1	6.04	0.539	3
34	弥 左 門	1	37.07	3.530	12	92	彦 七 郎	1	6.04	0.328	3
36	弥 左 門	1	31.10	3.227	2	93	新 右 門	2	5.22	0.446	3
41	三 郎 左 門	1	26.09	2.636	6	94	七 郎 シ	2	5.12	0.450	2
42	四 郎 兵 門	1	25.16	2.770	7	95	弥 十 郎	1	4.16	0.362	2
48	源 四 郎	1	20.00	2.6	1	96	弥 八 郎	1	3.26	0.309	2
49	縫 殿 丞 馬	2	19.16	1.975	5	98	太 郎 兵 門	1	2.24	0.224	1
51	对 助 八 郎	1	19.06	2.496	1	99	記 八 郎 四 郎	1	2.00	0.160	1
52	弥 三 郎	2	17.26	2.051	5	100	八 郎 二 郎	1	2.00	0.2	1
56	四 三 郎	1	16.20	2.009	3	102	太 郎 二 郎	1	1.18	0.128	1
57	藤 三 郎	1	16.12	1.364	5	103	与 三 右 門	1	1.18	0.128	1
59	藤 三 郎	1	15.10	1.505	7	104	弥 七 郎	1	1.18	0.09	1
62	藤 三 郎	1	14.17	1.602	1	105	藤 三 郎	1	1.15	0.15	1
63	藤 三 郎	2	14.12	1.455	6	106	三 郎 右 門	1	1.10	0.107	1
65	二 郎 四 郎	1	13.18	1.185	4	107	彦 三 郎	1	1.06	0.096	1
68	二 郎 四 郎	1	13.02	1.699	1	108	彦 兵 門	1	1.06	0.12	1
69	木 八 崎	1	13.02	1.699	1	109	七 郎 三 郎	1	0.24	0.048	1
70	四 郎 右 門	1	12.20	1.567	2	111	雅 丞	1	0.20	0.04	1
						112					

表 6 分付主内訳表 (上位三名)

分付主	分付地	分付農民	(畝)	(石)	筆数	分付農民	(畝)	(石)	筆数
加賀地 自己名請地 332畝07 36石054 43筆	加賀分 455畝11 38石09 75筆 21名	内蔵助 主水斗 主市衛門 市良兵衛 久順 市右衛門	17.20 41.00 16.06 17.26 25.16 3.18 4.00	1.441 5.33 1.791 1.788 2.770 0.288 0.4	4 1 4 6 7 2 1	大蔵學 弥四郎衛門 弥四郎衛門 弥四郎衛門 弥四郎衛門 源二良	34.12 19.06 28.20 2.20 16.20 9.14 6.04	3.713 1.656 3.060 0.213 2.009 1.124 0.539	6 8 6 1 3 2 3
豊後地 自己名請地 279畝09 28石185 51筆 (屋敷地名請人)	豊後分 254畝22 24石559 58筆 15名	雅楽助 主斗良 藤三良 二良四良 助二郎	89.23 17.08 16.72 13.18 1.78	8.769 1.036 1.364 1.185 0.128	17 5 5 4 1	内蔵助 大膳門 藤左衛門 木八三 彦	1.24 9.26 8.00 13.02 1.06	0.180 1.059 0.72 1.699 0.096	1 2 1 1 1
源兵衛 自己名請地 193畝06 20石657 35筆	源兵衛分 339畝26 34石346 72筆 20名	民部少 内蔵助 弥衛門 弥衛門 弥左衛門 弥八郎 三良右衛門	144.04 11.06 0.24 3.06 0.20 2.20 1.70	15.323 0.672 0.048 0.32 0.053 0.213 0.107	19 1 1 1 1 1 1	雅楽助 大源左衛門 源左衛門 縫殿助 源右衛門 与三右衛門 彦兵衛	2.00 23.14 35.00 1.28 9.24 1.18 1.06	0.2 2.581 3.08 0.127 0.892 0.09 0.12	1 1 11 2 3 1 1
						外拾市 衛門由馬 衛門馬郎 三郎	1:26 18.16 56.29 2.24 19.06 0.15	0.115 1.56 0.28 2.496 0.15	2 7 15 1 1 1

※ 太字は、他に分付主を有さない者

されているのではなく、複数の分付主から分付されているという、いわゆる散りがかり的な関係が認められることである。このことは土地そのものに対する複雑な権利関係そのものを検地帳上においてとった表現形態であると言える。しかるに、名主―作人―下作人という身分的な上下関係を設定することは不可能である。ただ特定の分付主から分付されている者に限り、身分的な上下関係を設定することが可能であろう。

以上が佐竹氏の手による検地であるが、当村における広汎な分付記載で特徴づけられる検地は、記載形式、又、太閤検地一般に展開された小農民自立政策をとったという点において、豊臣直臣団における検地政策基調を踏襲しているが、こと分付記載に関しては、佐竹氏独自の検地政策に基づくものであると考えられる。これは、石田三成によって実施された那珂川・久慈川流域との在地性が反映されているように思う。両川流域は、佐竹氏の本領として早くから手中に把握されていた地域であることから、当村との小農民の自立度が異なっていたと考えられ、言いかえるなら、小農民の自立度の低い当村における検地は、広汎な分付記載をもって小農民自立化の貫徹を図ったものである。

(3) 分類(C)『徳川検地』

(1) 大久保十兵衛(長安) 検地

ここでとりあげるのは、信太郡小松村と同郡烏山村の場合である。

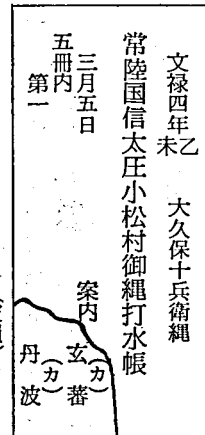
小松村は、土浦の南に位置する村高四〇〇石の村である。まず検地帳の記載形式と表題を示す。

下畠^{なまあけ} 廿歩 式升 与三右衛門分作

下畠^同 四畝八歩 一斗式升八合 外記分作

下畠^同 五畝歩 一斗五升 同人分作

常陸国における太閤検地の実態(山田)



特徴は、名請人名の下に「分作」、「分主作」という記載が全筆に付されており、又、屋敷帳にも居と付されている。さらに徳川初期検地帳の特徴とされる広汎な分付記載はみられず、ただ屋敷帳、総筆数二〇筆にのみ認められる。検地帳の分析結果を示すと表7となる。まず注目されるのは、名請人総数が非常に少ないことであり、したがって、一人平均反別、石高も多い。前述の当村と村高で大差のない筑波郡山口村の名請人総数一二名の約三分の一の数である。さらに各階層の比率をみるなら、分類(A)・(B)として検討してきた前述二ヶ村の各階層の比率は、五反以下の零細農民が八〇%前後であり、上層になるにしたがってその比率が低くなるという様相とは、明らかに相違がみられよう。そして屋敷持名請人も一七名で全体の四一・五%を占める高率を示し、武士的名前を有するものの大半は高持層である。このような豊臣直臣団による検地帳の分析結果と異なった階層比率を示す徳川検地の基調はいかなるものであったろうか。まず、徳川初期検地の特徴は、一般的には広汎な分付記載が認められることである。しかしながら当村における検地帳には分付記載はなく、ただ屋敷帳だけに全筆認められる特殊な形式である。この屋敷帳だけに存在する分付主は、「伝蔵」とと「角右」の二名で、前者の被分付農民は一名、後者のそれは七名である。しかし、この両者がいかなる身分の者か不明である。これは、徳川検地にみられるところの、給人統制を強化しながら農

表 7 検地帳分析表

	郡 村 名	信 太 郡 小 松 村			
	年 代	文 禄 4 年			
筆数	全 内 屋 体 敷	846 20			
反 別	全 一 人 平 均 体 敷 最 高 反 別	6075畝28 148. 05 807. 26			
石 高	全 一 人 平 均 体 敷 最 高 持 高	387石54 9. 452 47. 022			
	屋 敷	有	無	計	%
名 請 人	8町以上～9町未満	(1)		(1)	31. 7
	7 " ～8 "	(1)		(1)	
	6 " ～7 "				
	5 " ～6 "				
	4 " ～5 "	(1)		(1)	
	3 " ～4 "	3 (2)	(1)	4 (3)	
階 層	2 " ～3 "	4 (3)	2	6 (3)	24. 4
	1 " ～2 "	1	2	3	
	9反" ～1 "		1	1	
	8 " ～9反"				
	7 " ～8 "		1	1	
	6 " ～7 "	1		1	
表	5 " ～6 "	1	3 (1)	4 (1)	43. 9
	4 " ～5 "		1	1	
	3 " ～4 "				
	2 " ～3 "	2	3	5	
	1 " ～2 "		2	2	
	1 反 未 満	2	8 (2)	10(2)	
	計	17(8)	24(4)	41(2)	
	屋敷地名請人 %	41. 5			

<備考> 229畝26石 (11・036) 不作を含む

※ () は武士の名前を有するもの

民統制をも強化するという知行付百姓の設定⁽⁴⁾ではなかろうかと考えている。としたなら彼らは徳川氏の下級給人であることになり、その検地方法においては、徳川氏独自の打出しを行なったと言えよう。

以上のことを総合してみると、徳川検地の政策基調は、小農民の自立化を強力に推進せしめたものではなく、中世的名主、士豪層が中心となって名請されたもので、それは、中世的権利関係の容認という結果であると言える。さらに検討するなら、屋敷持名請人が全体の四一・五%の高率を示すことは、彼らは当然夫役負担者として把握された者であろうし、この夫役負担者を小農民一般に賦課することは事実上不可能である。したがって、この夫役負担者の把握を意図した当村の検地は、広汎な小農民自立化の方向とは逆に、阻止的に作用するものであり、故に、中世的権利関係の容認という結果でしか現われ得なかったと言える。検地の政策基調がその対象地であるところの在地に貫徹する度合というものは、言うまでもなく在地の生産力、及び諸勢力との対抗関係によって規定されるものであり、それが、後進地帯Ⅱ関東・東北、とりわけ常陸国における場合、検地施行者が、彼らの抵抗を受けて、妥協を余儀なくされた場合も少なくなかったであろう。さらに、徳川氏の場合、天正一八年関東入封以来、新領土の掌握に専念していたことでもあり、このような意味においても、まさに新領土の現実により適応した政策基調を展開したもので、その一端を当村の検地に当てはめるのもあながち不当ではなからう。

次に、もう一ヶ村烏山村の場合を検討してみよう。当村における現存する検地帳は全六冊であるが、表欠、破損のため判読不可能な部分も若干あるため、集計は判読可能な限りにおいて行なった。まず表題と記載形式を示そう。

烏帳 文禄四_{末乙} 大久保十兵衛縄

常州信太庄烏山村御縄打水帳

三月廿三日

(マヤ) 安内者

六冊内第一

越後丹人

宮内

上畑 式畝廿八歩 式斗三升式合 勘解由分作

上畑 六畝式十歩 四斗八升七合 同人分作

上畑 式畝廿八歩 式斗五升式合 文二郎分作

前述の小松村検地帳と全く同一記載形式をとっている。又、名請人名の下に「分主作」、「分」が付けられ、屋敷帳にも「居」と記されている。しかし、分付記載は全くない。田畑の割合は若干の畑勝地で、下田、下畑が全耕地の六割を占め、さらに、「不作」、「永不作」が六町四反余打出され、苛酷な打出であるとともに、生産力が低位である一端を窺い得るものである。検地帳の分析表を示すと、表8となる。名請人総数七二名のうち、五反以下の零細農民が約六〇%を占め、上層になるにしたがってその比率が低くなるという、(A)・(B)の分類として検討した階層表に類似したものである。前述の小松村と比較してみると、検地打出高がほぼ同じであり、かつ同一の検地奉行であるにもかかわらず、両階層表を検討してみるとかなりの相違が認められよう。小松村の場合、二町以上が一三名、そのうち最高反別所有者は八町余でかなりのひらきが認められるが、当村では二町以上一三名は同じであるが、最高反別所有者が三町七反余で、ひらきがない。又、五反以上一町未満の階層は、小松村一〇名、当村一六名、さらに、五反以下は小松村一八名、当村四三名で圧倒的に多く、両者の差違はこの階層に負うものである。したがって当村における徳川検地は零細農民であれ、自立小農民として名請しようとした結果であり、小松村において展開された検地政策基調と同じものとは言いがたい。以上検討したように、徳川氏の検地政策基調は、在地の現実に適応した基調をもって展開され、豊臣直臣団のそれとは対照的である。

表 8 検地帳分析表

	郡 村 名	信 太 郡 烏 山 村			
	年 代	文 禄 4 年			
筆 数	全 内 屋 敷	1324 24			
反 別	全 一 人 平 均 最 高 反 別	5843畝07 81. 04 379. 25			
石 高	全 一 人 平 均 最 高 持 高	392石217 5. 447 23. 988			
	屋 敷	有	無	計	%
名 請 人 階 層 表	3町以上～4町未満	5 (4)	(1)	6 (5)	18.1
	2 " ～3 "	4 (1)	3 (1)	7 (2)	
	1 " ～2 "	4 (2)	5 (2)	9 (4)	22.2
	9反 " ～1 "	1			
	8 " ～9反 "				
	7 " ～8 "	1		1	
	6 " ～7 "		3	3	
	5 " ～5 "		3	3	
	4 " ～5 "	(1)	1	2 (1)	59.7
	3 " ～4 "		3	3	
	2 " ～3 "	1	4	5	
	1 " ～2 "		8 (1)	8 (1)	
	1 反 未 満	2	23(5)	25(5)	
	計	18(8)	54(10)	72(18)	
	屋敷地名請人 %	25.0			100

<備考> () 内は武士の名前を有する者

(ロ) 結城検地
これから検討を行なう結城検地の新治郡三ヶ村は、佐竹氏一族の蔵入地が設定されていない地域である。最初に田

辺十右衛門等のグループによる冲宿村の場合を検討してみよう。冲宿村は、霞ヶ浦に面した低地の村で、度々氾濫による被害を受けていた。全耕地の七五%が下田・下畑で占められ、当該検地帳の「不作」、「午不作」（文禄三年）という記載を拾い上げると、四五町八反余で全体の二八%をも占める劣悪地である。現存する検地帳は八冊（写）で、その内、新開帳と屋敷帳が一冊づつである。検地帳の表題と記載形式を示すと、

文禄四 ^乙 未年	
常陸国新治郡冲宿郷	
御縄打水帳	
三月九日	
八冊之内	
安内者 ^(マコ)	玄兵衛
	賀車蓄

地境

上田 沓反三畝拾七歩 縫殿助

同 上田 沓反貳畝貳拾歩 甚五良

同 上田 沓反四畝歩 主計

となり、一筆ごとの分米の記載もなく簡素な形式で、分付記載もない。検地帳の分析結果を示すと表9となる。名請人総数九〇名の内、五反以下と二町以上の階層が共に三九名で、四三・三%を占め、五反以上一町未満の階層が少ない。そして屋敷持名請人が全体の半数以上の六三・三%を占める。このような分析結果は、大久保十兵衛検地が行なわれた小松村と同様であり、徳川氏独自の検地政策基調で臨んだものと言えよう。

最後に、青木勘右衛門尉等のグループによって行なわれた田中、玉取の両村を検討してみよう。両村は、このグル

表 9 検地帳分析表

	郡 村 名	新 治 郡 沖 宿 村			
	年 代	文 禄 4 年			
筆 数	全 内 屋 体 敷	1519 63			
反 別	全 一 人 平 均 最 高 反 別	16488畝11 183. 09 782. 25			
	屋 敷	有	無	計	%
名 請	7町以上～8町未満	3		3	43.3
	6 " ～7 "	1		1	
	5 " ～6 "	3 (2)		3 (2)	
	4 " ～5 "				
	3 " ～4 "	22 (1)	2 (1)	24 (1)	
	2 " ～3 "	7 (3)	1	8 (3)	
人 階 層	1 " ～2 "	2	2 (1)	4 (1)	13.4
	9反 " ～1 "				
	8 " ～9反 "	1		1	
	7 " ～8 "	3	1	4	
	6 " ～7 "				
	5 " ～6 "		3	3	
表	4 " ～5 "		2 (1)	2 (1)	43.3
	3 " ～4 "	1		1	
	2 " ～3 "	3 (1)	(3)	6 (4)	
	1 " ～2 "	7	11 (2)	18 (2)	
	1 反 未 満	4 (1)	8 (1)	12 (2)	
	計	57 (1)	33 (9)	90 (2)	
	屋敷地名請人 %	63.3			

＜備考＞ 午不作・不作4579畝25

開 1153畝27を含む

※ () は武士的名前を有するもの

1プがまず最初に検地を打出した村である。田中村は、中世においては田中庄三郷の、そして玉取村は方穂庄で、それぞれ中心的な位置を占めていた村⁽¹⁵⁾で、この地域の生産力を把握するための指標とみなされていたと考えられる。

表 10 検地帳分析表

郡 村 名		新治郡田中村	
年 代		文 禄 3 年	
筆 数		1002	
反 別 合 計		10700畝05	
石 高 合 計		1068石9238	
名 請 人 階 層 表	8町以上～9町未満	1	(%)
	7 " ～8 "		
	6 " ～7 "		
	5 " ～6 "		2.5
	4 " ～5 "		
	3 " ～4 "	(1)	
	2 " ～3 "	(3)	
	1 " ～2 "	28(15)	
	9反 " ～1 "	6 (4)	
	8 " ～9反 "	4	31.3
	7 " ～8 "	7 (4)	
	6 " ～7 "	7 (6)	
	5 " ～6 "	9 (6)	
	4 " ～5 "	9 (6)	
	3 " ～4 "	14(3)	
	2 " ～3 "	22(7)	66.2
	1 " ～2 "	43(14)	
	1 反 未 満	21(21)	
計		195 (90)	

まず田中村は村高一〇七〇石余の大きな村で、現存する検地帳は全九冊の内、六冊だけで、破損が甚だしく、屋敷帳も欠いている。この文禄三年検地の後、元和六年にも検地が行なわれ、総反別一三九町八反余、内屋敷地が三町一反五畝余が打出されている。文禄三年の現存六冊分の集計では総反別一〇七町余で、元和六年との差は三〇町余となり、したがって、約七〇％余の集計結果を示すものである。表欠のため、記載形式だけを示そう。

河はた
下畠 老町老反歩 四石四斗
下畠 老畝拾八歩 老斗四合
下田 老畝拾八歩 老斗貳升八合
大里 兵庫
まつい 将監
弥八良

堅横の間数の記載が

ないだけで、太閤検地一般の記載形式をとっているが、全筆の凡そ七割に、「大里」、「菊地」等の肩書が記されているのが特徴である。検地帳の分析結果を示すと表10となる。

名請人総数一九五名の内、五反以下の零細農

表 11 肩書集計表

名	前	人 数	反 別 (畝)	分 米 (石)	筆 数
1	大里	21	1254.25	95.2038	137
2	野村	9	966.02	53.694	92
3	杉山	11	710.14	65.983	77
4	菊地	9	598.18	40.786	35
5	入江	5	263.09	19.199	25
6	井上	8	224.20	16.405	21
7	稻葉	5	203.26	17.000	19
8	飯岡	4	203.26	36.340	33
9	若の	5	184.09	21.929	25
10	かち (梶)	1	180.01	13.757	20
11	横嶋	1	159.22	10.876	15
12	江戸	3	153.29	11.236	12
13	はりは	4	120.02	9.059	15
14	遠藤	6	108.29	8.465	10
15	松井	3	101.28	8.139	16
6	中山	3	89.20	7.680	13
17	おの村	3	71.00	4.951	9
18	なか	3	70.25	5.951	9
19	大塚	2	66.28	4.501	8
20	広齋	3	44.27	4.262	22
計		109	5778.00	475.4168	613

民が一二九名で六七%を占め、最初に検討した豊臣直臣団による検地結果に類似するものであり、二町以上の階層が極めて少ない。そこで記載形式に示された同じ肩書を有する名請人ごとに集計したのが表11である。総数二〇の異なった肩書に一九五名のうちの五六%にも及ぶ一〇九名が名請され、総反別一〇七町余のうち、五三%の五七町余が所有されている結果となる。村内最高の高持である大里家は、二一名の一族で構成されていて、村内におけるいわば草分け的存在であるが、この二一名の内訳をみると、最高が「但馬」で三町三反余、他に一町以上所有者が「四良へもん」、「将監」、「主計」、「大学」の四名で、五反以下の零細

な者が一二名存在する。彼らは大里家に抱えられていた隷属的な作人であったと考えられ、彼らを肩書を付けながらも帳付けしようと思図したものである。

次に、屋敷持名請人の検討をすると、前述したように屋敷帳は現存していないが、安政元年一二月の写で、「文禄四年常州新治郡田中村地持家数改扣¹⁶」という史料がある。この奥書には、

右文禄年中之改扣年数相立切損し候ニ付安政度田畑改之節引合改印取候得共元和度江者引合不申用立書ニ者有之候古来の百姓相分り候定ニ候子々孫々迄粉失無之様可致候

とあり、安政二年に名寄帳を作成するため文禄年間の帳簿に引合わせて確認したらしい。この史料を整理し表記したのが表12である。

これによると総反別一三七町八反一畝余で、これは元和六年の検地帳の総反別一三九町八反余と大差はない。したがって田中村の総反別を示すもので、しかも登録人のほとんどが武士的名前を有するものである。ここで注目されるのは、田中村全耕地がわずか三八名の者によって所有されていることであり、検地帳の分析表に示されている、全耕地の七〇％余が名請人総数一九五名によって所有されている結果と比較し大きな相違が認められよう。この相違は両史料の性格を十分吟味してみなければ正確さを欠くことは否めない。しかしそこから文禄期段階の農民経営の実質的な一端を窺えるのではないだろうか。「地持家数改」に登録された有力農民は、屋敷持で夫役負担者層であり、彼らの経営の主体は、検地帳に名請された零細農民を従えた、いわば家父長的経営形態であったと言えよう。当村における検地施行者の意図は、右のような家父長的経営形態の解体を意図したもので、小農民自立政策の貫徹を図ったもの

表 12 文禄4年地持家数改扣

	(畝)		(畝)
大里和泉	886.09	野村美濃・大隅	1578.24
丹波	708.20	長田駿河	1059.00
丹後	391.20	大塚主税	813.00
但馬	312.20	風野丹後	705.00
土佐	298.25	遠藤大隅	649.05
出羽	241.15	定使	450.18
豊前	164.15	小野村主	406.21
尾張	162.05	梶近江	345.00
源兵衛	30.00	入江弥十郎	341.00
計 9 名	3196.09	堀畑弥左衛門	314.28
杉山外記助	287.23	広瀬弥八良	180.20
豊前	268.18	飯岡新庄	180.00
対馬	169.08	中山将監	156.06
計 3 名	725.19	川田主斗	135.12
菊地但馬	551.15	纏隼人	120.02
大隅	213.06	道場(法伝寺)	99.00
計 2 名	764.21	岡本雅楽助	70.00
井上豊後	403.00	袖振大炊助	40.00
玄番	311.03	石田彦四良	35.07
計 2 名	714.03	なうけ	20.12
稻葉民部	374.00		
雅楽助	316.07		
計 2 名	690.07	総 計	39 名
		総 反 別	13781.24

七八
である。

次に玉取村の場合を検討してみよう。現在する検地帳は全七冊であるが、若干破損もあり、集計は判読可能な限りにおいて行なった。記載形式は、表題には「常陸国新治郡玉執村御縄打水帳⁽⁴⁷⁾」とあり、他は田中村検地帳と全く同一の形式である。田畑とも下田・下畑・野畑が圧倒的に多く七二%に及び、「開」「永荒」「荒」地で占められている。これを反映してか、畑方の石

表 13 検地帳分析表

	郡 村 名	新 治 郡 玉 取 村			
	年 代	文 禄 3 年			
筆数	全 体 内 屋 敷	1590 44			
反別	全 体 一 人 平 均 最 高 反 別	15162畝12 64. 28 1002. 18			
石高	全 体 一 人 平 均 最 高 持 高	920石305 3. 990 73. 248			
	屋 敷	有	無	計	%
名 請 人	10 町 以 上	(1)		(1)	10. 8
	9町以上～ 10町未満				
	8 " ～ 9 "	(1)		(1)	
	7 " ～ 8 "	2 (1)		2 (1)	
	6 " ～ 7 "	2 (1)		2 (1)	
	5 " ～ 6 "				
	4 " ～ 5 "	3 (1)		3 (1)	
	3 " ～ 4 "	2 (1)		2 (1)	
	2 " ～ 3 "	7 (2)	4 (1)	11(3)	
階 層 表	1 " ～ 2 "	6 (2)	16(4)	22(6)	24. 1
	9反" ～ 1 "	1	2	3	
	8 " ～ 9反"	1	4	5	
	7 " ～ 8 "	1	3	4	
	6 " ～ 7 "	1	4 (2)	5 (2)	
	5 " ～ 6 "		10(2)	10(2)	
	4 " ～ 5 "	3	10(1)	13(1)	65. 1
	3 " ～ 4 "	2	13	15	
	2 " ～ 3 "	1	17(3)	18(3)	
	1 " ～ 2 "	2	32(4)	34(4)	
	1 反 未 満	3	49	52	
	合 計	39(10)	164(17)	201(27)	100
	屋敷地名請人 %	19. 4			

<備考> () 内は武士的名前を有するもの

盛は一定していなく、上畑が二三八で、中畑六、下畑三というように、この地域一般より二つ劣りに盛られてい
る。検地帳の分析結果を示すと表13となる。名請人総数二〇一名の内、五反以下の零細な者が一三二名の六六%を占

め、又、屋敷持名請人も各階層の総数に対する比率は上層になるにしたがって高くなるが、名請人総数に対して極めて低い。さらに、武士の名前を有する者二七名の内、屋敷持が一〇名で、そのすべてが一町以上の高持層である。又、五反以下の零細農民のなかにも武士的名前がみられる。これらのなかには、村切りが確定していない時期⁽¹⁸⁾でもあり、隣村蓮沼村からの入作者も含まれていたと考えられる。分付関係を検討してみると、広汎には認められないが、分付主は「豊前」、「豊後」、「若狭」、「隼人」の四名で、それぞれの被分付者は四名、二名、二名、一名で、彼らはすべて一筆か二筆の名請地しか持たない者である。又、「一の矢分」という肩書記載が四三二筆、反別にして三一町六反一畝余が名請されている。これは、一の矢天王社周辺の集落（一の矢坪）で、玉取本村より西側集落に当たるものである。その名請人は、三町二反九畝余を名請する「出雲」を筆頭に三九名で、ほとんどが数筆しか名請されていない零細農民である。玉取村の鎮守は正八幡宮（別当観音寺）であるが、一の矢天王社には宮守をつけられ、一の矢坪独自の祭祀を行っていたと思われる。当該検地帳で「一の矢分」として明記したことは、本村の鎮守より重視されたことになる。⁽¹⁹⁾

さて、これまで検討した田中・玉取両村は、戦国期の小田氏治世の時代から館を構えた土豪層の拠点とされていたこともあって、又、地理的条件からも一はやく検地を受けた。その検地政策基調は、中世の権利関係を否定し、自立小農民の把握を強力に推進せしめたものであると言えよう。

(三) 常陸国における太閤検地の意義

——むすびにかえて——

常陸国における太閤検地、とりわけ佐竹領の検地は、翌文禄四年の知行割の朱印状の歴史的な前提となるもので、

表 14 検地帳分析一覽表

分類	検地奉行	郡村名	(A)(畝)	(B)(石)	(C)	(d)	(e)	A(畝) C	B(石) C	d(%) e	e(%) e	が60 e%以 上	分別 記載
(A)	石田三成	那珂・上河内	1936.09		87	4	78	22.25	2.241	4.6	89.7	○	無
(B)	佐竹義宣	筑波・山口	3992.25	414.37	112	10	89	35.19	3.700	8.9	79.5	○	有
(C)	大久保十兵衛	信太・小松	6075.28	387.54	41	17	18148.05	9.452	41.5	43.9			無
		信太・鳥山	5843.07	392.217	72	18	43	81.04	5.477	25.0	59.7 (60)	○	無
		田辺十右衛門他	16488.11		90	57	39183.09		63.3	43.3			無
(C)	青木勘右衛門	新治・玉取	15162.12	920.305	201	39	132	75.13	4.578	19.4	65.7	○	有
		新治・田中	10700.05	1068.9238	195		129	54.26	5.481		66.2	○	有
	城	尉他											(別記載)

〈凡例〉 (A)=反別總計

(B)=石高總計

(C)=名請人總数

(d)=屋敷持名請人 (e)=5反以下名請人数

佐竹氏の領国統一が名実共に実現された重要な意味をもつものである。又、天正一八年の秀吉からの朱印状では貫文制がとられていたが、この太閤検地以来、石高制へと移行し、中世的荘・郷を廃し、近世村落への移行の第一歩を築いた意義は、ただ佐竹領の検地に限られるものではなく、徳川検地にも認められることは言うまでもない。そこで、これまで検討を行ってきた村々の分析概要をまとめて、表14とした。豊臣直臣団による純粋な太閤検地として検討した(A)・(B)両村の場合は、全く同じ特徴を見出すことができた。それは、名請人總数が多く、したがって、一人平均反別(A・C)・一人平均石高(B・C)は、非常に少ない。さらに特徴的なことは、屋敷持名請人の割合($\frac{d}{e}$)も

一〇%にも満たず、五反以下の零細農民($\frac{a}{a+c}$)が圧倒的多数を占める。このような政策基調は、太閤検地一般にみられる小農民自立政策Ⅱ「作あい」否定の論理を貫徹せしめたことに他ならない。既に多くの諸先学に指摘されているごとく、「作あい」否定の法令は、年代、発布者、地域が異なるにもかかわらず統一された基調で発布されていることは周知のことである。又、山口村の場合で広汎にみられた分付記載は、基本的には隸属的小農民の請作関係を、さらには土地そのものの複雑な権利関係を示すにとどまらず、同時に隸属的小農民に対して分付記載によって自立小農民Ⅱ年貢負担者としての公的地位を与えようとしたものである。

一方、分類(c)として検討したところの徳川検地の場合は、一貫した政策基調はみられない。小松・沖宿村の場合の特徴は、一人平均反別($\frac{A}{C}$)と、一人平均石高($\frac{B}{C}$)が極端に多いことであり、それは名請人総数が少ないことに負うものである。そして、屋敷持名請人($\frac{d}{c}$)が半数前後と多く、分付記載がないことである。初期(天正・文禄期)の徳川検地について、検地帳の名請人は直接生産者でなく、年貢負担者であり、後進地関東では中世小名主・土豪層が中心となつて多く名請⁽²⁰⁾されている、と言われるのも不当ではない。この点からも、前述したが、小農民自立政策の貫徹は不徹底を余儀なくされたのである。このことは、一方では、不断の戦争に備えて軍役の確保が年貢増徴策と同じ比重で封建領主層の最も重要な関心事であつた当時においては、その最も有力な給源をなす中世的名主、土豪層に権力の基盤をおこうとしたことは当然とも言えよう。このことが妥当しない田中・玉取両村のように強行に小農民の自立化を目指したことは、その地域性と、さらには族縁的結合がかなり強く、家父長的な経営形態が根強く存在していたことに起因するものである。以上のような徳川検地の特徴は、関東入封以来の経過から推しても、まさに新領土である関東農村の在地性に適応した政策をとつたことになり、豊臣氏の政策基調とは対照的である。

註

- (1) 三鬼清一郎「太閤検地論争は何を遺したか」(『歴史学研究』四一三号)
- (2) 太閤検地に関する論考、『水戸市史』(上巻)、宮川満「太閤検地論」(Ⅱ)、近世村落成立期に関する論考、永原慶二・長倉保「後進Ⅱ自給的農業地帯における村方地主制の展開」(『史学雑誌』六四一・二)、鳥塚恵和男「江戸時代関東一農村における農業経営型態の変遷」(『農業経済研究』二四一)、小室昭「笠間藩における村落構成の一型態」(『歴史教育』六一)、斉藤茂「近世村落の成立と展開—土浦藩領常陸国太田村について—」(『地方史研究』一〇七号)
- (3) 拙稿「常陸国における太閤検地の施行過程」(『立正史学』四三号)に詳細をゆずり本稿ではその概略を示すにとどめた。
- (4) 「右同」に掲載したものと重複するが、新たに新治郡中根村を加え、検地帳の残存状況を明示した。
- (5) 速水佐恵子「太閤検地の実施過程」(『地方史研究』六五号)の分析視角によった。
- (6) 堀江俊次・川名登「下総における近世初期徳川検地について」(『史学雑誌』二八一三)
- (7) 「土浦城主并役人方之覚」(新治郡上埴村、酒井泉家文書)

常陸国における太閤検地の実態(山田)

- (8) 同村検地帳の分析は、『水戸市史』(上巻)によった。
- (9) 『茨城県史料』(近世地誌編)所収
- (10) 『近世地方経済史料』(第八巻)所収
- (11) 「常陸国新治郡沢辺村古新記録」(同村、御田寺義憲家文書)によると、「沢辺村長百姓七人統之覚」として、「沢辺村七人統之百姓往古々御除地所持有之」、「文禄二年(三の誤力)御縄改之節七人之内御除地小前江渡し置候者有之候ニ付御掛嶋田藤一郎様々蒙御咎メ」ったために、「御取上御縄地ニ相成候事」という記述がある。
- (12) 明治大学刑事事博物館所蔵文書
- (13) 山口村、清水昭家所蔵文書
- (14) 北島正元、『江戸幕府の権力構造』では、上総国周准郡前窪郷検地帳に現われた分付主はすべて徳川氏の家臣であるとされている。さらに、堀江・川名報告(註(6))にも紹介されている。
- (15) 『新編常陸国誌』(巻四)
- (16) 同村、大里正夫家文書
- (17) 記載形式でいくつか例外したように、管見の限り、徳川検地の検地帳表題は、すべて「御縄打水帳」であって「御検地帳」ではない。
- (18) 同村の寛永八年の検地帳(同村、佐藤茂家文書)には、「運沼分」の記載はなく、この時期村切りが確定する。
- (19) 享保年間には祭祀権をめぐる出入が起き、一の矢坪の分

村願強訴にまで発展する。

(20) 【横浜市史】

△付記▽

本稿作成につき、数度にわたる調査にもかかわらず、文書所蔵者各位より御理解と御協力をいただいた。記して感謝したい。

